

諏訪湖の水位変動 藤森説に再び光

諏訪市博物館ですわ大昔フォーラム



藤森栄一が60年以上前に唱えた諏訪湖の水位変動説について話す三上徹也さん

諏訪市博物館と一般社団法人大昔調査会は19日、同市出身の考古学者藤森栄一（1911〜73年）が曽根遺跡研究で提唱した諏訪湖の水位変動説に焦点を当てた「すわ大昔フォーラム」を同館で開いた。湖水位に関しては、県環境保全研究所と信州大学が4月、数百年から数千年ごとに上昇や低下を繰り返していたとする研究成果を公表。講師3人の話を通じて、科学的にも証明された藤森考古学の力を再認識した。（鮎沢健吾）

曽根遺跡は諏訪湖間欠泉センター（諏訪市）の沖合数百メートルにあり、1908年に発見された。フォーラムで同会の三上徹也さんは、湖

三上さんら講師3人が解説

底遺跡の謎をめぐっていわゆる「曽根論争」が起きる中、藤森栄一が63年、諏訪湖は増水と減水を繰り返した、曽根遺跡の時は陸上だった説を提唱したと解説した。

諏訪湖周の遺跡は時代によって標高の上下があることを突き止め、従来の説とは全く違った考え方の水位変動説に行き着いたと説明。遺跡の時代や標高分布などから、諏訪湖は過去に5度の増水期、4度の減水期があったことを導き出したとした。「60年前にこの説を唱えていた。（県研究所と信大による）今回の調査で科学的に裏付けられてうれしい」と話した。

三上さんに続き、下諏訪町諏訪湖博物館専門研究員の山口徹也さん、同研究所の葉田野希さんが諏訪湖の水位変動をテーマに講演。定員いっぱい約40人が聞き入った。